2019年1月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第504号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

第31回 地方出版文化功労賞 受賞記念講演

80年前、日本のムラはブータンだった

戦前、日本の農村について、米国の人類学者が書いた
最初で唯一の本『須恵村』を紹介する『忘れられた人類学者』

講演者・フリーライター（元西日本新聞記者）田中一彦

授賞式での田中氏

ローカルな文化を盛り立てるという地方出版文化賞の理念が、地方の新聞社で仕事をしてきた者としては、まず一番に共感を覚えました。過去の受賞作には、渡辺京二さんの『逝きし世の面影』や中村哲さんのアフガンの作品など九州発が目立ちます。私の本を作ってくれた忘羊社の藤村興晴さんは前にいた石風社で中村哲さんの本にも関わっていました。その石風社は2回受賞しています。私の本の受賞は「我が意を得たり」です。

エンブリー夫妻のこと

最初にエンブリー夫妻のことを簡単に紹介します。

夫はジョン・フィー・エンブリーというアメリカの社会人類学者で、1908年にコネティカット州のニューヘイヴンで生まれ、1950年に42歳の若さで亡くなりました。飲酒運転の車にはねられた事故でした。調査の舞台・熊本県球磨郡の須恵村にやって来たときは27歳、シカゴ大学の院生でした。

妻のエラは1歳下で、極東のニコラエフスクという町で生まれたユダヤ系ロシア人。父親は日本と水産貿易を営んでいました。ロシア革命後の1919年、10歳の時に日本に亡命。エンブリーと結婚するまで10年、日本に住んで日本語はペラペラでした。

2人は、昭和10年に須恵村、現在はあさぎり町須恵地区ですが、シカゴ大学から派遣されて1年間滞在し、計2200ページを超える日記と1600枚の写真を残しました。それを基に、エンブリーが『日本の村　須恵村』、エラが『須恵村の女たち』を著し、ともに邦訳されています。『須恵村』は、戦前、日本の農村について人類学者が書いた最初で唯一の本で、世界中でベストセラーになり、今も日本研究者の教科書となっています。『忘れられた人類学者』はこの2人を紹介するものです。

なぜ私が須恵村を取材したか

その須恵に、私は2011年から14年まで2年10カ月、移り住んで取材し、夫妻の日記が保管されているコーネル大学まで足を運んで本にまとめました。なぜそこまでしたのか。実は、新聞記者時代の2007年、「貧しいけれど世界一幸せな国」と言われたブータンに関心を抱いて、その実態を知るために現地を訪問しました。そのころ読んだのが『須恵村』で、80年前の村の風景や、貧しくとも満足して生き生きと暮らす人々の生き方が今のブータンにそっくりだったのです。

ブータンは中国とインドに挟まれた仏教を国教とする小国です。私はその後も、2008、11年に取材しました。でも、ブータンに行くには1回40万円ほどかかるんですね。取材と言っても1週間。そこで、戦前の日本の田舎がどうだったのか、そして80年たってどう変わったのかを探る方向にシフトした、つまり私の幸福論の取材の舞台を、ブータンから須恵村に切り替えたというわけです。

ブータンと80年前の須恵村のどこがそっくりなのか。まず、エンブリーの日記の一節を紹介します。

「須恵の暮らしは厳しい。朝は早く、激しい肉体労働が伴う。しかし、焼酎があり、たくさんの焼酎を飲める祭りでいっぱいの陰暦の暦がある。暗い夜があり、魅力的な娘たちがいる。月光が、美しい山々があり、そして年を取っても話ができる古い友達がいる。…私は、球磨郡の魅力を理想的なものと考えてもいいと思った」

これは、1936年12月6日、エンブリーが日本滞在を終え、横浜港から日本を離れる前夜に船室で書いた日記の最後の文章です。日記の結びにふさわ

しく、1年間暮らした須恵村に対する真情が凝縮しています。でも、80年前に書かれたこの一節の「須恵」と「球磨郡」を「ブータン」と置き換えても、何の違和感もない。「80年前、日本のムラはブータンだった」というわけです。

ブータンと須恵村の文化的類似点

では、具体的には、どこが似ているのか。ブータンは、日本の照葉樹林文化の源流と言われていますが、顔つきも衣服も、主食が米というのもよく似ています。子守や、里山、棚田の風景もそっくりですね。農薬を使わない有機農業です。ブータンも須恵村の人たちも祭りが大好きで大酒のみです。

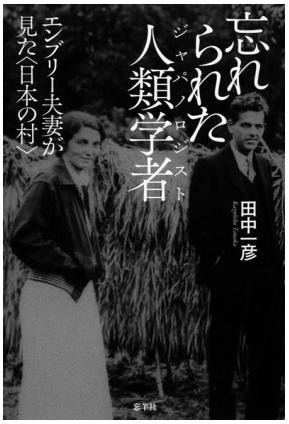
それと、当時の須恵村で言えば、幕末の開国、つまり鎖国を解いた近代化から70年。ブータンで言えば、やはり鎖国を解いた1960年から50年経った現在という、近代化の途中という、文化とか文明の変化の途中という時代的な類似点もあります。

でも、一番似ているのが、そうした文化の根っこにある、助け合いの文化だと思いました。

エンブリーが『須恵村』で最も伝えたかったのが須恵村の「協同」、原文の英語では「コ・オペレーション」ですが、助け合いのことです。例えば、須恵村では「かったり」という共同労働で田植えしますが、ブータンでも現地の言葉で「ラコ」と呼ばれる共同労働があります。家を建てる時も、洪水で壊れた橋を架けかえる時も、協同でやります。つまりエンブリーは、須恵村の中にブータンと同じ助け合いの暮らしを見たということだと思っています。

エンブリーが取り上げた協同の中で面白いのは「贈答」、贈与論。ものをあげたり、もらったりするという、暮らしの知恵です。エンブリーは贈与を結婚や葬儀など11項目に分類しています。中でもとても面白いと思ったのが、一つは「盃」。盃のやりとりです。

もう一つ、11項目の最後に挙げているのが「談話」、スピーチです。私も今ここで話していて、みなさんに聞いて頂いています。これも贈答の関係になる。エンブリーは日常会話、「おはよう」という朝の挨拶、季節の挨拶、その言葉のやりとり、それがまさしく贈与、贈答だという。そういう関係が、お返しをする、感謝の心によってずっと続いていく、まさしく贈与交換の文化です。



「忘れられた人類学者　エンブリー夫妻が見た〈日本の村〉」忘羊社刊／ISBN978-4-907902-16-2／税込価格2,160円

「日本を愛した人類学者　エンブリー夫妻の日米戦争」忘羊社刊／ISBN978-4-907902-19-3／税込価格2,376円

「協同」が本のテーマに

今の社会は貨幣、お金を介して商品やサービスをやりとりする等価交換です。これだと支払った時点で人と人の関係が終わってしまう。ところが、贈与交換だと受け取った感謝を相手、または次の人にまた渡して続いていく。人の協同の関係が続いていくのが村の暮らしでした。

でも、当時の村人が協同という言葉を知ってるはずもありません。須恵に行って初めて知ったんですが、この協同を意味する「はじあい」という言葉に出合ったんです。現地では「はじゃあ」と言います。当時もこの言葉は使われていただろうと言われています。現地でこの「はじあい」という言葉を知って、「協同」が本のテーマに決まりました。

ただ、私の本を読んだ方は、一番面白かったのは女性の生き方だとおっしゃる方が結構多い。エラの『須恵村の女たち』には、こんなビックリ仰天の表現もあります。

「おへそを比べあい、性器や陰毛の生え方の形を見せ合ってさえしていた」

男社会で女性も厳しい労働でしたが、夫以外の男性と関係を持ち、宴会では卑猥な歌と踊りに興じる女たちが描かれています。結婚や離婚の決定権を握り、同時に女だけの協同のネットワークで助け合う女たちは、エラによれば、当時でさえ「予想できないほどの著しい自立性」を発揮していました。この点でもブータンと似ています。夜這いがあり、どちらも一夫多妻制です。

それと、エンブリーが須恵村で知った日本の村の特長は、自治と民主主義でした。封建的な家父長的な村で、不思議な感じもしますが、エンブリーは「須恵村にはボスはいない」と何度も繰り返しています。そして、村の協同を「民主的」と表現しています。また、地方の議会や行政も民主的と、ローカルな政治の民主性、地方分権を強調しています。

それが、須恵村を去って5年後に始まった太平洋戦争中、戦後のエンブリーの足取りに決定的な影響を与えました。そのことを私は『忘れられた人類学者』の続編の『日本を愛した人類学者』で描きました。村の民主主義は、人々の協同に基づいた長い歴史によって築かれたものだということをエンブリーは須恵村で知りました。

あらためて地方出版文化賞ですが、拙著は、３１年という歴史、平成とともに歩んできた賞の、平成最後の功労賞を頂いたことになります。今年は明治150年。私ら昭和年代ですと、明治は遠くなりにけりですが、これからの時代を担う人たちには、昭和は遠くなりにけり、という感じなんでしょうね。つまり昭和を顧みて将来を考えるという意味でも、戦前を振り返った拙著が、この機会に受賞したことには、感慨深いものがあります。

（たなか　かずひこ／フリーライター・元西日本新聞記者）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

『長い長い郵便屋さんのお話』●カレル・チャペック著／栗栖 茜訳

郵便屋のコルババさんは手紙を配達するのが仕事。ある真夜中、郵便局の中で不思議な小人たちと遭遇。彼らは封を開けなくても手紙の内容がわかるという力を持っていた。その力で宛名のない一通の手紙の中身が熱いプロポーズだと知ったコルババさんはどうしても届けてあげたくなり、あてもないのに長い長い旅に出た。果たして手紙は届くのか？こうしたタイトル作をはじめ1932年に書かれた9つのお話。「ロボット」という言葉を作った作者が生まれ育ったチェコの小さな町では妖精やカッパや魔法使いが存在すると信じられ、お話の中でもごく自然に登場する。

「長い長いいたずら子ネコと王女様のお話」では魔法使いを捕まえるために世界一周の旅に出た探偵がナガサキに行き、わずかだが日本を紹介していて親しみが持てる。作者の兄ヨゼフ・チャペックの挿絵もほのぼのとした雰囲気を醸し出し、「語り」の味を大切にした大人でも子どもでも楽しめる童話集。

◆ 2,160円・四六判・324頁・**海山社**・東京・20181025刊・ISBN9784904153123

『近世への扉を開いた羽柴秀吉　―長浜城主としての偉業を読む―』●太田浩司著

本書は、長浜城主時代の秀吉を正面から取り上げた好著。長浜は最古の近世城下町。あの安土よりも整備された完成度の高い碁盤目状の都市だったという。その基礎をつくったのが秀吉だった。町は朱印地（年貢免除地）の特権が与えられ、町人自治のシンボルとなる。平成16年の「秀吉公ゆかりの石碑・石柱建立事業」により当時の長浜の町並を復元、朱印線の境界には35本の石柱が建てられた。本書を片手に町の境界線を巡りたくもなる。

ところで、秀吉は天正3年(1575)に「藤吉郎」から「筑前守」へと名乗りを変えている。が、3年後に再び「藤吉郎」に戻り、その後の天正9年（1581）にまた「筑前守」を名乗りだす。これには中国攻略の状況の変化が背後にあったからだとの播磨良紀氏の指摘がある。それを踏まえて著者は言う。「筑前守」の名乗りが、「節目を自ら祝うために自称」だったのではないかと。偶然かどうか、その前後にのみ信長が秀吉の居城を訪れている。

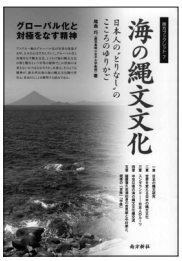
◆ 1,620円・B6判・256頁・**サンライズ出版**・滋賀・20181027刊・ISBN9784883251902

『地方に「かえ～る人」3　－自分スタイルではたらく、暮らす』●丸尾宜史編

「かえ～る」には、都市から地方に「帰る」、新しい仕事を生み出して地方を「変える」、それらを継続して繰り返し地方に「還る」の三つの意味が込められている。著者自身、2009年に東京から岡山県津山市にUターンし、地域応援クラウドファンディングなどを起業した。その著者が、Uターン、Iターンして岡山県北部で蔵元、花売り、飲食店、インキュベーター、ネクタイ製造、カフェレストラン、棚田再生、ジーンズ縫製、精肉卸、スーパーマーケットを生業とし、実際に働き暮らす10人と語り合ったインタビュー集の3弾目である。他県出身で大企業を辞めて妻の実家のスーパーマーケットを継いだ経営者は、公正な商いと食育、農業生産者と一緒になった商品開発などの地域循環型経営で住民の信頼を得る。全員に共通することは、事業の根幹に地域の課題やこれからを見据えた、地域に対する当事者意識を持っていることである。かえ～る人たちの晴れの心意気が響いてくる。

◆ 1,620円・四六判・181頁・**吉備人出版**・岡山・20180913刊・ISBN9784860695583

『海の縄文文化　－日本人のとりなしのこころのゆりかご』●尾曲　巧著



著者は冒頭で、グローバル化や新自由主義、格差社会などの言葉で表現されるような、「今だけ、自分だけ、お金だけ」を特徴とする時代状況を、日本人の意識の古層に息づく縄文の思考が突き崩す可能性を秘めているのではないかと言う。縄文の思考とは「和と贈与」という言葉で表現される。この縄文的思考を歴史的に考察する際に著者が注意を促しているのは、縄文文化がかつて日本列島一帯に一律に広がっていたものではないということだ。縄文文化とは時代や地域により多様で濃淡があったのだが、戦前の歴史観にもみられるように日本一国史的観点からそのような一律化した誤った縄文時代像が形成されていると。そんな濃淡のある縄文文化の中で著者が注目するのは縄文草創期以来南九州以南に花開いた海の縄文文化圏である。縄文人の起源の一つとされる南方ルート、すなわち東南アジア南部にかつて存在した大陸スンダランドにまで遡るようなその文化圏は、開放的で船の操作に長けた海洋民、浦人たちによって歴史的に脈々と受け継がれてきたとされる。

◆ 1,080円・A5判・59頁・**南方新社**・鹿児島・20181020刊・ISBN9784861243912

『キジムナー考　－木の精が家の神になる』●赤嶺政信著

キジムナーは沖縄の人々にとって最も馴染み深い妖怪であるが、著者は従来の研究には重要な論点が看過されてきたのではないか、と言う。著者はまず多様な伝承を一つ一つ辿り、類話を重ね合わせていきながらキジムナーの起源を明らかにし、富をもたらすとともに残忍な側面を持つ両義的性格を考察する。そしてキジムナーと木の精との同一性を指摘、「山から木を運ぶ」キジムナーの一面に注目する。そこから八重山地域の建築儀礼の起源となった小人伝説に辿り着くのである。その小人たちは、生き疲れた若者が、その虚に一夜の宿を借りたヤンバルアワブキの精たちであった。朝になって材木を運んでいく彼らの後をつけていくと若者の生家のあった場所に立派な家が出来上がっているではないか…この伝説はこれまでキジムナー伝承の類話として取り上げられたことはなかったという。後半、考察はこの「小人伝説」を受けて、沖縄奄美地方の建築儀礼における茅や樹木の霊へ、そして中柱信仰へ、家の守護神へと進んでいく。

◆1,080円・A5判・123頁・**榕樹書林**・沖縄・20180830刊・ISBN9784898052037

『日本を愛した人類学者　－エンブリー夫妻の日米戦争』●田中一彦著

第31回地方出版文化功労賞受賞作『忘れられた人類学者』の続編。前著は人類学者エンブリー夫妻の日本での研究をもとに、昭和初期の熊本の農村の風習などを主に紹介していますが、本書はエンブリー夫妻そのものについて描かれています。特に太平洋戦争時の夫ジョン・エンブリーについて詳しく調べられています。当時のアメリカでは日本研究者が集められ、敵国日本の国民がどういった性質を持っているか詳しく研究されていました。その中で日本文化の特殊性を重要視する自民族中心的な意見が力を持ちます。しかしエンブリーは日本の特殊性をことさら強調する意見には批判的で、戦争の原因は日本が西洋の帝国主義政策に追随したためという意見を持っていました。一年に及ぶ日本での研究の賜物です。そのため日本移民収容所の運営など、戦時関係の部局に勤めながら、FBIにマークされてもいました。日本を愛し自民族中心主義に抗し続けたエンブリーの生涯を描きます。

◆2,376円・四六判・351頁・**忘羊社**・福岡・20181208刊・ISBN9784907902193

地方小出版流通センター　ジャンル別 新刊案内

2018年11月1日～30日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

価格は税込（消費税率8%）表示です。

【雑誌】

◆**GREEN REPORT** 467　2018年11月号　廣瀬 仁編　A4　192頁　2800円　地域環境ネット［埼玉］978-4-905457-99-2　18/11

◆**響き合う街で** No.86　2018年11月号　やどかり出版編　B5　60頁　1296円　やどかり出版［埼玉］978-4-503-21616-8　18/11

◆**かまくら春秋** No.582　伊藤 玄二郎編　B6　89頁　320円　かまくら春秋社［神奈川］978-4-7740-0766-3　18/10

◆**くらしと教育をつなぐ We** No.217　2018年12／1月号　中村 泰子編　A5　80頁　864円　フェミックス［神奈川］978-4-903579-86-3　18/12

◆**調査情報** No.545　2018年11－12月号　岩城 浩幸編　257mm×160mm　96頁　789円　TBSテレビ［東京］978-4-906908-74-5　18/11

◆**Be!** 133号　No.160　今成 知美編　A5　110頁　864円　アスク・ヒューマン・ケア［東京］978-4-909116-06-2　18/12

◆**児童文芸** 2018年12－2019年1月号　高橋 うらら編　A5　112頁　864円　あるまじろ書房［東京］978-4-904387-17-7　18/12

◆**御影史学論集** 43　酒向 伸行編　B5　97頁　2160円　岩田書院［東京］978-4-503-21610-6　18/10

◆**女性と経験** 第43号　女性民俗学研究会編　B5　152頁　2160円　岩田書院［東京］978-4-503-21611-3　18/10

◆**山岳修験** 第62号　日本山岳修験学会編　B5　117頁　2700円　岩田書院［東京］978-4-503-21613-7　18/10

◆**風俗史学** 67号　日本風俗史学会編　A5　80頁　2160円　岩田書院［東京］978-4-503-21614-4　18/09

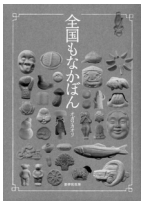
◆**関東近世史研究** 第82号　関東近世史研究会常任委員会編　B5　98頁　2160円　岩田書院［東京］978-4-503-21630-4　18/10

◆**仏事** No.218　2018年11月号　奥村 昇編　A4　112

売行良好書　期間：2018年11月15日～12月14日

［出荷センター扱い］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『フェルメール』2160円・ナナロク社　(2)『踏み絵とガリバー』2052円・弦書房　(3)『よみきかせのきほん』810円・東京子ども図書館　(4)『全国もなかぼん』1728円・書肆侃侃房　(5)『未来ちゃん』2160円・ナナロク社　(6)『子どもたちの心に届ける　自然・ことば・遊び』1080円・木城えほんの郷　(7)『京都の市電　昭和を歩く』1620円・トンボ出版　(8)『ナガサキの郵便配達』874円・スーパーエディション　(9)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』864円・リーブル出版　(10)『玉　古代を彩る至宝』1944円・ハーベスト出版　(11)『明恵　栂尾高山寺秘話　上』2376円・弦書房　(12)『明恵　栂尾高山寺秘話　下』2376円・弦書房　(13)『長い長い郵便屋さんのお話』2160円・海山社　(14)『日本を愛した人類学者』2376円・忘羊社



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『おすすめ文庫王国２０１９』820円・本の雑誌社　(2)『本の雑誌　４２７号』880円・本の雑誌社　(3)『東都寄席演芸家名鑑』2000円・東京かわら版　(4)『東京かわら版　１２月号』500円・東京かわら版　(5)『そばですよ』1836円・本の雑誌社　(6)『伯耆米子城』1944円・ハーベスト出版　(7)『教養の場としての英文読解』2700円・ふみくら書房　(8)『玉』1944円・ハーベスト出版　(9)『歴史家と噺家の城歩き』1944円・高志書院　(10)『北海道いい旅研究室　１６』810円・海豹舎

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『旅先銭湯』1296円・さいろ社　(2)『島津日新公いろは歌』540円・高城書房　(3)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(4)『古事記１３００年　神話のふるさと』1543円・山陰中央新報社　(5)『調査されるという迷惑』1080円・みずのわ出版　(6)『走る日本語、歩くしまくとぅば』1296円・ボーダーインク　(7)『踏み絵とガリバー』2052円・弦書房　(8)『語り継ぐ横浜海軍航空隊』1080円・有隣堂　(9)『札幌の地名がわかる本』1944円・亜璃西社　(10)『四国懐菓子』1080円・美巧社　(11)『中世の名門　宇都宮氏』1620円・下野新聞社　(12)『ふくしま新聞史読本』1728円・歴史春秋社　(13)『麦の日記帖』2160円・プレスアート

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼すでに、報道されていることですが、長く地方出版の本やその活動を支えてきてくれた出版業界誌**【出版ニュース】**（出版ニュース社）が、2019年3月で70年余の歴史を閉じて、廃刊となります。年1回出ていた【出版年鑑】も2019年は出ないとのことです。毎日新聞によると出版物についての情報を網羅する紙の本はこの【出版年鑑】だけだそうです。半世紀にわたって編集を担ってきた清田義昭代表は「後継者がおらず潮時」と毎日新聞のインタビューで説明しています。「同誌の前身は１９４１年に戦時統合によって設立された日本出版配給（日配）の機関紙で、49年の日配解散を受けて、同年発足した出版ニュース社が発行を引き継いだ。月３回発行で、出版業界にまつわる統計調査・動向などを紹介してきた。」（日本印刷新聞社サイトから）

▼**第34回梓会出版文化賞特別賞**に当センターで長く取引をさせていただいている言語学専門出版社、**ひつじ書房**さんが選ばれました。同賞は、優れた出版活動を展開している中・小出版社を顕彰するものです。また、**出版梓会新聞社学芸文化賞特別賞**に沖縄の**ボーダーインク**さんが選ばれました。同賞は朝日新聞や共同通信社など全国紙、通信社の文化面、読書面担当記者が選考する賞です。「写真集や民俗芸能を含めて今の沖縄をフォローしている点が評価された」とのことです。

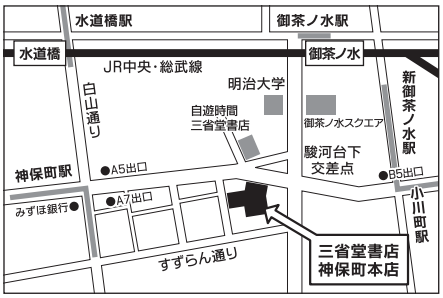
郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店　営業のごあんない

神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM ～ 8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。